



ところが、残念ながら“承久の変”は失敗に終わつてしまつた。その理由はいろいろ考えられるが、広池博士は『道徳科学の論文』において、当時の武士たちが、鎌倉幕府の執権たちに目前の利益でつられ、ひとたび命令を受ければ、朝廷でもかまわずに進撃するようになつたことを、大きな一因として指摘されている。

その結果、朝廷方はあえなく敗れてしまう。そのうえ、執権北条義時の処断によつて上皇が遠い島へ遷されるといふ、まことに痛ましい結末となつたのである。三上皇のうち、まず後鳥羽上皇は隠岐へ、また順徳上皇は佐渡へ流された。さらに土御門上皇も、事变には直接関係なかつたが、土佐へ遷られて、後に阿波で亡くなつた。そのほか親王なども、近辺に配流されている。

日本の歴史上、京都という都を追われて、隠岐とか佐渡という遠い離れ島へ流され、そこで亡くなられた上皇がおられるということは、まことに痛ましい事實といわ

なければならぬ。しかも、この事变を表面的にみるならば、無謀な計画による不幸な内乱であり、悲劇的な最期であつた。

けれども、それは本当に無茶で無駄なことだつたかといふと、けつしてそうではない。事実、この約百年後に、後醍醐天皇の討幕計画が達成されて“建武の中興”となり、それから約五百年後にふたたび尊王討幕運動が盛り上がり、明治維新”を導き出した、といつてよいであろう。端的にいえば、つとに平泉澄博士の看破されたように、明治の源流は承久の変から発しているのである。

さて、はるばる京都から

5 流謫地の佐渡で二十余年

ところが、残念ながら“承久の変”は失敗に終わつてしまつた。その理由はいろいろ考えられるが、広池博士は『道徳科学の論文』において、当時の武士たちが、鎌倉幕府の執権たちに目前の利益でつられ、ひとたび命令を受ければ、朝廷でもかまわずに進撃するようになつたことを、大きな一因として指摘されている。

その結果、朝廷方はあえなく敗れてしまう。そのうえ、執権北条義時の処断によつて上皇が遠い島へ遷されるといふ、まことに痛ましい結末となつたのである。三上皇のうち、まず後鳥羽上皇は隠岐へ、また順徳上皇は佐渡へ流された。さらに土御門上皇も、事变には直接関係なかつたが、土佐へ遷られて、後に阿波で亡くなつた。そのほか親王なども、近辺に配流されている。

日本の歴史上、京都という都を追われて、隠岐とか佐渡という遠い離れ島へ流され、そこで亡くなられた上皇がおられるということは、まことに痛ましい事實といわ

佐渡へやつて来られた順徳上皇は、真野^{まの}湾に面した真野^{まの}の国分寺に近い頓宮（仮の御所）「真野宮」ですごし、まもなく泉^{いずみ}という所に質素な「黒木の御所」を建てて住まわれた。そして、ここで都へ戻れる日を夢見ながら、結局二十二年を過ごされ、仁治三年（一二四二）九月、四十六歳で亡くなられた。

そのころの様子は、平^{たいら}経高^{つねたか}という公家の日記（『平戸記』仁治三年十月十日条）にしるされている。およその意味をいえば、順徳上皇は、ずいぶん健康にも留意され、とくに病気というほどのことはなかつた。しかし、佐渡のような厳しい気候状況の下で、二十年以上過ごされたから、体にかぶれができてもなかなか治らない。焼き塩を当てて治そうとされたが、だんだん体が弱っていく。そのうえ、もうこれで都へ帰れる望みがないと諦められたのか、九月に入ると、数日間も断食の後、九月十二日、ついに絶命^{ぜつめい}された。御遺体は翌日、真野宮の近くで火葬^{かそう}に付され、その遺骨^{おこ}がまもなく京都大原の御墓所（現在の御陵地）に納^{おさ}められた。このように痛ましい最期を約一ヶ月後に都の公家が伝え聞いて、日記に書き留めたのである。

それから、すでに七百五十年近くたつた。私はかねてから、この順徳上皇^{きよと}最期の地を訪ねたいと思い、今年（平成三年）の三月二十一日、彼岸^{ひがん}の中日に、佐渡へ向かつた。そのときは、卒業論文で『禁秘御抄』を研究した山本憲二君（稻沢女子高校教

諭）といつしょに、京都から夜行列車で新潟まで行き、そこから船（ジェット・ホイール）で佐渡の両津へ渡り、その先是現地に詳しい倉田さんと柴田さんに乗用車で案内してもらつたから、ほぼ一日半で主な史蹟を見学することができた。

しかし、順徳上皇の当時は、京都から北陸道をへて、険しい越路に入り、寺泊^{てらどまり}から小船に乗つて佐渡へ着くまでに、約一ヶ月かかっている。それだけでも、都の人には大へんな長旅^{ながたび}であつたにちがいない。しかも、年若い上皇が、冬の厳しい北海の孤島で、じつに二十年以上も不自由な生活をされたのかと思うと、胸をしめつけられるような悲しみを覚える。

このような生涯を終えられた順徳天皇は、いつたいどういう考えをもつておられ、またどんなことをなさつたのか。その精神を史料に即してふり返つてみたい。

6 著作にみる天皇の精神

順徳天皇といつても、あまりなじみのない名前かもしれない。しかし、幼いころ「百人一首」を詠じた人は、その後が順徳院の御歌^{おうか}だということを思い起こしていただきたい。



順徳天皇尊像（宮内庁所蔵『天子摂関御影』より）

つかりと見つめ、それを学ぶことだ。つまり先人の伝統といいうものを心に体することによって、ほんとうによい歌ができるのだ、とのべておられる。さらに、この順徳天皇が漢文で書かれた著作としては、『順徳院御記』『禁秘御抄』などが知られている。このうち、前者は日記である。天皇御自身の日記は、平安時代の宇多天皇・醍醐天皇のころからあり、後鳥羽天皇も順徳天皇も書いておられる。貴重な史料であるが、残念ながら全文が伝わっている例は少なく、ほとんど他書に一部分を引用された逸文の形でしかみられない。

そのうち、後鳥羽上皇の『後鳥羽院御記』建暦二年（一一一〇）十月二十五日条の逸文に、つぎのような記述がみられる。順徳天皇の即位にともなう大嘗祭の少し前に書かれたものである。

「百敷」というのは皇居を意味するから、「宮中の古い昔の姿は、偲んでも偲んでも偲びきれないほど、まことに優れた立派なものであつた」という懐古の御歌である。しかし、たんなるノスタイルジーではない。その裏に、昔の朝廷を手本とし模範と仰ぎながら、そうではない現状に対する深い嘆きと厳しい批判がある。さらにいうならば、現状を「古き軒端の昔」に返さねばならないという「王政復古」の御志をひそかに表明された御歌、と考えてもよいかと思われる。これは建保四年（一一一六）、二十歳の作と伝えられている。

順徳天皇は、このようなすぐれた和歌を数多く作られた。御製集として、在位中の『禁秘抄』や、佐渡における『順徳院御百首』などがある。また、『八雲御抄』は、和歌の心得をまとめられた歌論書であつて、そのなかに「稽古と言ふは、天竺・震旦・万葉集・古今集よりほかいづることなし」と、しるされている。

すなわち、稽古ということは、何も天竺＝印度や、震旦＝中国のまねをすることではない。ひたすら日本古来の『万葉集』や『古今集』のような先人たちの歌の心をし

百敷や 古き軒端の しのぶにも なほあまりある 昔なりけり

國家（天皇）、悠紀・主基の神殿において、祈請せらるべき申し詞、一昨日これを（順徳天皇に）教へ申す。この事、最も秘藏の事なり。

すなわち、大嘗祭のとき、悠紀殿・主基殿という特設の神殿（大嘗宮）で、天皇みずからどういうことをお祈りされるかは、歴代の天皇がつぎの御方へ直接お伝えになる秘事とされてきたので、それを後鳥羽上皇は次男の順徳天皇に教えられたといふ。その祈請文はつぎの通りである。

伊勢の五十鈴の河上に坐す天照大神、また天神地祇・諸神明に曰く、朕、皇神の広き護りに因りて、國の中平らかに安らけく、年の穀は豊かに稔り、寿は上下を覆ひ、諸の民を救はん。よりて今年新たに得る所の新飯を供へ奉ること、かくの如しと云々。

これによれば、大嘗祭のときに天皇がお祭りになるのは、皇祖天照大神をはじめ天神地祇・諸神明であり、その神々に対して、国中の平安と五穀の豊穰を祈願され

る、ということがよくわかる。大嘗祭の御祭神、大嘗祭の目的などについては、以前から、いろいろ議論されてきたが、その正解はここに端的にしるされている。まことに貴重な記事といわなければならぬ。

このようにして、順徳天皇は父の後鳥羽上皇から折あるごとに教えを受けて成長されたから、御在位中、ひたすら宮中祭祀に勤しんでおられる。その様子は、順徳天皇の日記『順徳院御記』逸文にも書かれている。

たとえば、大嘗祭をすまされた建暦二年（一二一二）の十二月二十五日条には、毎年、年の暮れに、賢所内侍所で奉納される御神樂の奉仕者について、「上古は然るべき人、或は能に堪る人、これに参る」ことになつていたが、昨今は「最上に非ず。遺憾の事なり。末代、皆以てかくの如し」と、その現状を厳しく批判している。ということは、ここにも宮中の衰退した現状を改めて本来のあるべき姿に返すべきだ、というお気持があらわれている。